

〈エッセイ〉
【活動報告】

オンラインによる朝鮮大学校との学生交流企画の試み

斎 藤 敬 太

1. はじめに

本稿では、2021 年 2 月に実施した「第 3 回 津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校 学生交流企画（オンライン）」の報告を行う。

筆者は、2018 年度より津田塾大学において「マルチリンガリズム」という学部生対象の授業を担当している。この授業では、社会言語学や日本語教育学といった観点から、日本で生活する海外にルーツを持つ人々の概要、来日理由、各コミュニティ、彼らの言語環境などの現状や課題などについて扱い、これらを知ることにより多文化共生について考えるきっかけとなることを主な目的としている。

そして、授業と関連して 2018 年度より毎年計画・実施しているのが「津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校 見学・学生交流企画」（以下「学生交流企画」）である。

授業で紹介している人々の当事者と直に交流することこそが、多文化共生を考える上での近道である。

そこで、津田塾大学の近隣に位置する朝鮮大学校に在籍する在日コリアンの学生との交流を目的とした学生交流企画を計画し、授業の履修生から募った希望者とともに朝鮮大学校を訪問している。2018 年度、2019 年度と参加者から高評価を得たため、2020 年度も実施の方向で計画していた。

ところが、2019 年の終わりごろから始まった新型コロナウイルスの感染拡大はおさまる気配を見せず、2020 年度の「マルチリンガリズム」の授業はオンライン形式となった。当然朝鮮大学校への訪問も不可能な状況となったが、オンライン形式での交流企画の実施を模索し、朝鮮大学校側に提案、調整の結果、オンライン形式による学生交流企画が実現した。

2. 「マルチリンガリズム」の概要

まずは、筆者が担当する「マルチリンガリズム」について概要を述べる。この授業では前述の通り日本で生活する海外にルーツを持つ様々な人々について、主に社会言語学や日本語教育学の観点から彼らのコミュニティや言語環境などを紹介している。2019 年度までと同様 2020 年度も第 4 タームに開講し、全 9 回であった。2020 年度に実施した授業内容を表 1 に記す。

各回およそ 90～110 名が受講しており、期末レポートの提出者数は 109 名であった。

各回の授業内容詳細については割愛するが、「在日コリアン」については、第 2 回のテーマであるオールドカマーとして在日中国人（老華僑）と共に取り上げた。

表 1. 2020 年度の授業内容

第 1 回 (11/18)	本授業の概説、外国人住民の概要
第 2 回 (11/25)	オールドカマーとニューカマー① ーオールドカマーのコミュニティー
第 3 回 (12/2)	オールドカマーとニューカマー② ーニューカマーのコミュニティー
第 4 回 (12/9)	外国人集住地域と外国人散在地域
第 5 回 (12/16)	外国人住民の言語環境
第 6 回 (12/23)	日系人
第 7 回 (1/6)	ブラジル人集住地域
第 8 回 (1/13)	外国人と方言
第 9 回 (1/27)	まとめ（パラオの日本語）

3. 在日コリアン

「マルチリンガリズム」では、戦前から戦後すぐまでの時期に来日した朝鮮半島出身者及びその子孫を朝鮮籍・韓国籍・日本国籍に関係なく「在日コリアン」として紹介し、戦後に大韓民国から来日したニューカマーの「在日韓国人」とは区別したものとしている。

学生の中には、在日コリアンについてあまりよく知らない、という学生が毎年一定数存在しており、学生によっては最近来日した韓国人（ニューカマー韓国人）と混同する者もある。また、「在日コリアン（あるいは在日朝鮮人）」を知っている人々の中には、あまり良いイメージを持っていない者も少なくない。

これは、在日コリアンの団体の一つである在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）が支持する朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が日本とは正式な交流を持っていないこと、またこれらに対する日本のマスコミの報道などによるものが主な理由であると考えられる。

2020 年は、新型コロナウイルス感染対策の観点でさいたま市が市内の幼稚園や保育園にマスクを配布した際に埼玉朝鮮幼稚園を除外した問題や、朝鮮大学校の学生が「学生支援緊急給付金」の対象外となったこと、スポーツメーカーの NIKE の CM で在日コリアンが取り上げられたことなど、在日コリアンについてメディアで目に触れることが多かったが、むしろこれまではあまり取り上げられることがなく、彼らと交流のない人々にとっては「どのような存在なのかよく分からず、近寄りがたい」というのが実態である。

上述の朝鮮民主主義人民共和国が支援する在日コリアンの教育機関として全国に 64 のウリハッキョ（朝鮮学校）が存在するが、その中で唯一の大学校（日本の大学に相当）が、朝鮮大学校である。

朝鮮大学校は 1956 年に創立された。1959 年に東京都小平市に校舎を移転し現在に至る。8 つの学部、朝鮮文化コース、研究院などがある。津田塾大学から徒歩圏内に朝鮮大学校があるため、交流するのに適した条件といえる。

4. 目的

前述の通り、「マルチリンガリズム」の履修生

の中で在日コリアンについてよく知らない学生が一定数存在し、また、在日コリアンについて知っていたり、興味を持っていたりする学生もいる。そこで、学生交流企画を通して在日コリアンの学生と交流することで、異文化理解、エポケー、多文化共生などについてより身近なものとして考えてもらうことを目的として、2018 年度より「津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校 見学・学生交流企画」を毎年実施している。

5. オンライン形式による実施

2019 年度までは、朝鮮大学校を訪問し、

- ①朝鮮大学校食堂での昼食交流
- ②朝鮮大学校内の各施設の見学
- ③両大学の学生同士のフリートーク

という流れで実施していた。

特に 2019 年度は 2018 年度に行えなかった「朝鮮自然博物館」及び「朝鮮歴史博物館」の見学を加えることができた。

しかし、2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響により朝鮮大学校訪問を断念せざるを得ない状況となったため、Zoom を用いたオンライン形式をとることにした。オンライン形式をとることにより、津田塾大学と朝鮮大学校の学生同士の交流を継続することが可能となった。

6. 学生交流企画実施まで

まずは朝鮮大学校にオンライン形式での学生交流企画の実施を相談した。授業では前述の通り第 2 回の授業でオールドカマーとしての在日コリアンについて紹介し、在日コリアンのコミュニティ、朝鮮学校、言語などについて概説した。授業後半で「第 3 回 津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校 学生交流企画（オンライン）」の実施についてアナウンスを行い、2019 年度に実施した第 2 回学生交流企画の様子を紹介した。なお、この企画は自由参加かつ授業期間終了後に行われるものである旨も伝えた。授業後に Google フォームに学生交流企画の参加希望について書かせた。

先の参加希望のコメントを踏まえ、具体的な

候補日を提示し、第5回の授業後に Google フォームで参加希望者の参加可能日を聞いた。

しかしながら、新型コロナウイルスの影響で朝鮮大学校側との日程調整がつかなかったため、日程については決定次第希望者にメールを送るというアナウンスを第9回の授業で行い、Google フォームで連絡希望者を募った。

最終的に 2021 年 2 月 27 日 10:30-12:30 に決定したことを連絡希望者にメールで伝え、その上で改めて参加希望者を募った。

最終的には 2 年生～4 年生 9 名の参加希望者が集まった。参加希望者には、事前に質問したということについて Google フォームに書かせた。

以下に学生から送られた質問を記す。この質問は朝鮮大学校にも送ったが、質問は修正を加えず、学生の考え・認識がそのまま伝わるようにした。

- ・コロナが流行する以前と以後で学習環境に何らかの変化は生じましたか？
- ・コロナによる影響で学校生活などで大きく変化した事がありますか。
- ・今北朝鮮ではどのようなコロナ対策が行われているのか。
- ・日本で暮らす上で風当たりが強いこともあると思いますが、日本や日本人の姿をどのように捉えていますか？
- ・朝鮮大学校に進学された動機が気になります。進路選択において、自分のバックグラウンドはどれくらい意識されたのか、等を聞きたいです。
- ・朝鮮大学校に入学した経緯について。(保護者の方の意思／自分の意思で入学など)
- ・寮生活のいいところ、困ること。寮から出て生活したいと思うかどうか。
- ・「これお勧めします」といった本や映画があれば教えて下さい。(読んでほしい／見てほしいと思う作品)
- ・朝鮮と日本の家屋の違い、生活の中で違うと感じることがあれば教えていただきたいです。

質問の内容を見ると、新型コロナウイルスに関するものから朝鮮大学校に関するものまで様々である。

7. 学生交流企画当日

当日は欠席者がいたため実際の参加者は 6 名(筆者は除く)だった。なお、朝鮮大学校からは学生が 7 名参加した。

学生交流企画は、以下の内容で実施した。

- ①在日朝鮮人と朝鮮大学校についての話
- ②両校の学生同士のフリートーク

①については、毎年学生交流企画において朝鮮大学校側の調整を担当している外国語学部の許哲氏に依頼した。

その後、両校の学生の自己紹介を行った。津田塾大学の参加者は、今回の参加理由として

- ・複数の授業で在日朝鮮人について学んだ
- ・自らと違ったバックグラウンドを持つ人と交流したい
- ・せっかく津田塾大学の近くにある大学なので交流したい
- ・韓国語や朝鮮半島の歴史を学んだ
- ・在日朝鮮人を扱った映画やCM(先の NIKE)を観てもっと知りたくなった

などを挙げていた。

その後、両校の学生同士のフリートークを行った。フリートークではブレイクアウトを行うことで 2 つのグループに分け、筆者を含め両校の教員は学生のルームには入らなかった。少人数の学生同士のみで話す方が自由に会話できることなどから、2019 年度までの朝鮮大学校訪問時もフリートークの時間はグループに分け、かつ教師はグループに入らないという形式をとっていたが、オンラインでもこれを踏襲することにした。



図. 学生交流企画の様子

8. 学生交流企画参加者の感想

学生交流企画終了後、学生にはメールで感想を提出させた。2020年度は新たに朝鮮大学校の学生からも感想を募った。

以下に、参加者の感想を、改行等や明らかな誤字脱字のみ修正したほぼ原文で掲載する。

まずは津田塾大学の学生の感想を記す。

①交流の機会を設けてくださりありがとうございました。非常に有意義な時間でした。朝鮮大学校の学生さんたちが、本当に真剣に社会や世界と向き合っていることがわかりました。一方自分は、得た情報や学んだことを、自分のこととして結びつけきれていないと感じました。しかし、朝鮮大学校の学生さんたちの意識の高さや行動力はどこまで教育によって形作られたものなのかは気になりました。津田生、朝大生共通して迷っていたのは、お互いに「どう思われているか」を気にしていることと、「教わったこと、報じられていることが全てではない」とわかっていながら、事実や、他の視点へのアプローチの仕方がわからないことなどでした。これは私たちがこれから言葉を交わすことで、ある程度改善できると思います。とても有意義で、楽しかっただけに、対面ではお会いできなかったこと、今後の交流の機会が見通せないことが、本当に残念でした。朝鮮大学校という場所自体に興味があるので、来年度の交流会は朝鮮大学校に伺うことができ、枠に余裕があれば、今年の参加者にも声をかけていただければ幸いです。ありがとうございました。

②普段なら交流する機会の少ない在日朝鮮人の方とのコミュニケーションを通して、自分の中のぼんやりとした印象がはっきりとしたものになったような感覚がしました。様々なことを話しましたが、その中で一番強く思ったことは多角的に物事を見つめる姿勢が重要であるということと、自分の好きなように暮らすという選択肢がある社会にしていきたいということでした。自分のアイデンティティとは何かを考えさせられるような機会だったと思います。とても有意義な時間でした。

③今回参加した交流会はオンライン開催ではありませんでしたが、非常に内容の充実した2時間でした。私は先月提出した多文化共生に関するあるレポートで「様々なバックグラウンドを持つ人々が日本でより暮らしやすくするためには、まずは相手を知ることから始まるのではないか。」というような結論で終わってしまい、「でも実際は個人で何ができるのだろうか？」という所まで十分に論じることができず、その点について疑問を持っていました。そのこともあり、今回の交流会では、わたしと同じ「大学3年生」の朝鮮大学校の学生さんの声を聞きながらの対話は「○○さん」という個人を見て意見を共有することができ、より身近な存在として考える機会になりました。また、その対話を通して個人を知れたことで、参加前に漠然と感じていた緊張が薄らいだのを感じました。グループでは、投票権がないことによって日頃から朝鮮大学校の学生さんが感じている苛立ちや苦しさを知り、同じ社会の流れの中にながら日本という国に対して自分はまだまだ無関心であったと感じると共に、その言葉を通して、自分が選挙で一票投じる先を見極める際に必要な視点に気づかされました。学校生活についての内容では朝鮮舞踊や食事の話などをお聞きし、文化や習慣などにさらに興味を持つきっかけになりました。またこの様な機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。

④「朝鮮大学校」と聞いて自分が知っているのはその存在だけで、他に何も知らないことに気づき、参加を決めました。そこに通っている学生さんはどんな人たちでどんな生活を送っているのか、どんなことを考えているのか、どんなことを日本社会に対して感じているのか、自分と同じことを考えたりするのだろうか、様々な疑問が浮かび、話してみたいと思いました。実際、交流前は好きなことや好きな芸能人、アルバイトや学校生活などカジュアルな話が多くなることを想像していました。政治やアイデンティティ、歴史の話などはある意味お互い触れていいか迷う部分だと思ったからです。しかし、フリートークの9割強は

まさにそれらに関する話でした。若干の驚きとともに交流の時間が自分の予想以上に重要な時間になると確信しました。印象的だったのは「自分を知りたい、知らなくてはいけない」「知識を行動に繋げていく」「自分の問題として捉え、共に考える」という朝鮮大学の生徒さんの言葉です。また、将来の話になった時の「何歳になっても同胞社会に貢献する人でありたい」という団結の意思が強い姿はとても新鮮でした。時間がもの凄く短く感じ、もっと話すことができたらいのにと名残惜しさがあります。それ程一緒に考え、意見を共有することが楽しく、充実していたのだと思います。考えることも、学ぶことも多かった2時間でした。今回のような交流の機会を設けてくださり、また準備してくださり有り難うございました。参加できて本当に良かったと感じています。

- ⑤交流会がはじまるまで、かなり緊張していました。自分の発言に、意図せず差別的な意味が含まれていたら、自分のなかにも気づいていない、あるいは気づかないようにしていた偏見があるかもしれない、それで不快にさせてしまったら、と考えては、もっと事前に勉強しておくべきだった、と思っていました。実際に朝鮮大学の学生のみなさんと話し、はじめに、お互いのことをどう思っているのか、という疑問を互いに持っていて、違う存在だと思っていた在日朝鮮人の学生が実は自分と同じようなことを考えていて、ここで自分のなかで発言へのハードルが下がったように思います。自分とは異なるバックグラウンドを持っていると思っていた他者の共通点がまず見えてきたことが印象深かったです。それゆえに、私にとっては嫌だな、としか思わなかったようなヘイトスピーチや、明らかな差別やそれをめぐる報道に、彼女たちは命の危険を感じたことがあったり、多すぎて慣れてしまったりしてきたことに、自分と同じような学生がなぜこんな思いを抱かねばいけないのだろうと今も強く思います。今回の交流会から、「知らない」ことを認めたくて、臆さず当事者と対話することで、気づきを得るこ

とがあるのだと知りました。在日朝鮮人に限らず、今後、自分のなかの違和感や疑問はそのままにせず、向き合い続けたいと思います。今回はこのような機会をありがとうございます。少人数で和やかな雰囲気の中お話しができ、非常に良かったです。来年度、校舎訪問が可能になりましたら、ぜひ一緒にさせていただきたいです。

次に、朝鮮大学の学生の感想を記す。

- ①私は津田塾大学のみなさんとの交流会を通して、私たちのことを理解しようとしてくださる方々が身近にもいるのだと実感しました。特に私たちの世代となると、「在日朝鮮人」という存在すらも知らない年代だと思っていたので、在日朝鮮人の歴史を自ら学ぼうとしている津田塾大学の皆さんの姿勢にとっても刺激を受けました。そして皆さんが私たちの話を最初から最後まで親身になって聞いてくれてありがたかったし、勇気を貰いました。同世代の日本の大学の方々と「在日」について話し合ったのは初めてでしたが、またこういう交流会ができれば良いなと思いましたし、それまで私自身ももっと知識を増やさないといけないと改めて実感させられた良い機会になりました。
- ②予想以上に私たちを在日朝鮮人についてご存知で、また深く知ろうとしてくれることが嬉しかったです。朝鮮と聞いて、真っ先に思い浮かぶのが朝鮮半島だとの発言を聞いて驚いたと同時に、歴史的な視点で「朝鮮」というものを見てくださっているのだと感動しました。朝鮮のミサイル問題や歴史問題について質問を受けたとき、咄嗟に言葉が浮かびませんでした。何度も学んできたことでも、いざ他人に説明して伝える難しさを実感し、まずは自分がもっと自分たちのことについて学ばなければならないと思いました。またこのような機会があったらぜひ参加してみたいです。
- ③このような交流会に参加したのが初めてだったので、何を話せばいいのだろうと不安があ

りましたが、学びある楽しい時間を過ごせました。私たちにとっては普通のことでも、津田塾大学のみなさんにとっては感嘆するようなことだったり、その逆もあったりと新鮮な感覚でした。また、朝鮮についてどう思うか聞いた際に、初めは怖い国だと思っていたがしっかり学ぶとそうではなかった、朝鮮についてもっと知りたい、と思ってくださったことが非常に嬉しかったです。同時に朝鮮のことを聞かれた時に、上手く伝えることができず、自分もまだまだ学ばなければいけないし、ただ学んで自分の中で消化するだけでなく、発信するための知識を蓄えなければならないと感じました。少しばかりではありますが、お互いが持つ認識のズレを埋めることができたのではないだろうかと感じます。このような機会を設けてくださった先生方、ありがとうございました！

- ④在日朝鮮人のことを知りたいと思ってくださる方とお話ができて、自分もまた朝鮮に対して、情勢に対してもっと学ばなければいけないと感じた。お互い話をするすることで、理解が深まり連帯も生まれたので、このような機会を増やして、私たちの存在が2つの国の親善を促すものとなればいいと思った。
- ⑤昨年度に続き今年も津田塾大学のみなさんと、オンライン上ではありましたが、交流できたことをとても嬉しく思います。これからの社会の担い手である我々朝・日の学生たちがこのように会って話すことの大切さを改めて実感した大変貴重な出会いでした。在日朝鮮人社会や朝鮮学校を取り巻く日本社会の環境は悪化の一途を辿るばかりですが、その環境に落胆するのではなく、今回のような機会を通じて互いの理解を深めていく過程で、朝日・日朝の未来をより良い方向に一つずつ着実に進めていかななくてはならないと切に思いました。私はこれまでにも朝鮮大学校の学生交流団体である「朝日・日朝大学生友好ネットワーク」で

活動しながら多くの日本の大学生のみなさんと交流してきましたが、これからより一層活動に励みつつ、在日朝鮮人としてのアイデンティティを育んでくれた朝鮮学校、在日朝鮮人社会に少しでも恩返しをできるように努めて参りたいと思います。また、コロナがいち早く終息し、みなさんと朝鮮大学校のキャンパスでお会いできることを楽しみにしています！감사합니다 (カムサハムニダ)。

以上の感想から、学生交流企画が津田塾大学の学生にとって「異文化理解」「エポケー」「多文化共生」を考えるきっかけになったことが窺える。

また、朝鮮大学校の学生にとっても自身のルーツ、アイデンティティなどの発信・説明などについて考える機会になったことが感想から垣間見える。

これらのことから、学生交流企画が双方にとって意味のあるものであったと考えられる。

9. 今後の課題

今回は2018年度から数えて3回目の学生交流企画として、2019年度までの朝鮮大学校訪問の際とは異なる形ではあるものの無事に実施することができた。

2021年9月現在の新型コロナウイルスの感染状況を考えると、2021年度についても朝鮮大学校への訪問・見学は難しい可能性が高い。その場合は2020年度と同様にオンライン形式での学生交流企画を引き続き行うことで、津田塾大学と朝鮮大学校の交流を継続していきたい。

謝辞

学生交流企画実施にあたり、朝鮮大学校の皆様にお礼申し上げます。特に、許哲先生には日程の調整、朝鮮大学校の学生への周知など2019年度までと同様に2020年度も大変お世話になりました。

(斎藤敬太・本学非常勤講師)